セッション「アイヌをめぐる思想――和人の視点から」事後報告

開催日時：11月24日（土）10時～12時

世話人：水溜真由美（北海道大学）

報告者：水溜真由美（北海道大学）、樹本健（中京大学）

討論者：友常勉（東京外国語大学）

○報告要旨

第一報告：水溜真由美「同化か、民族主義か：武田泰淳『森と湖のまつり』を読む」

本報告では、武田泰淳(1912-76)の長編小説『森と湖のまつり』（1958）について、アイヌ民族の進むべき方向を「同化か、民族主義か」の二者択一として提示した作品として検討した。武田が、民族主義（民族独立）の理念とアイヌの「同化」が進む現状に引き裂かれつつ作品を執筆したことをふまえながら、物語が民族主義に対する同化の圧倒的な優位を裏付ける方向で展開することを指摘した。また、こうした展開には、アイヌをとりまく同時代の状況と共に、武田の実存主義的な世界観やナショナリズム批判などが反映していることも明らかにした。作品全体の評価としては、アイヌ研究のオリエンタリズム的な構造や血統主義的な民族主義に批判を投げかけた点などに、近年のポストコロニアル研究、ナショナリズム研究の知見を先取りする観点が見られることを指摘した。他方で、同化と民族主義を二元論的に捉えるフレームを前提している点、アイヌと和人との「混血」が進み一部の伝統文化が失われるとしてもなお、アイヌの民族主義が成り立ち得る可能性を想定していない点に限界があると論じた。他方で、作品にはオルタナティヴな民族主義の可能性を読み込む余地もあること、とりわけ末尾におかれた一太郎とアイヌの少年の会話は、若い世代のアイヌを担い手とする非本質主義的で開かれた民族主義の到来を予想させることを指摘した。

第二報告：樹本健「「宣言という暴力」：花崎皋平とアイヌをめぐって」

本報告では、アイヌ民族に関わり『アイデンティティと共生の哲学』（1993）で知られる花崎皋平（1931-）のアイデンティティ論の形成を辿った。具体的には、初期の著作『力と理性』（1972）で、ベンヤミン「暴力批判論」における「神的暴力」について、「宣言としての暴力」という独自の解釈を提出しており、それが花崎の「アイデンティティ」概念の原型となることを示した。アイデンティティは、自己の宣言・告白という言語行為の中で構築される事実性であり、発話を通じて初めて、既存の法秩序や表象体制では不可視だったものとして顕在化すると捉えられている。同じく「暴力批判論」を論じたバトラーの「非暴力」やデリダの「アポリア的経験」との共通性と差異を示しながら、この概念の背景に、花崎が全共闘学生の特別弁護人として関わった経験や、アイヌ女性村山トミとの出会いがあることを読み取った。とりわけ、村山のアイヌ宣言を受け止められなかった出来事が本質的な経験となり、もう一つの重要な概念「三人称としてのわたし」（『風はおのが好むところを吹く』1976）へと導いたこと、それが自己の中に他者性を見る「自己異化」の視点を開いたことを指摘した。一方で村山自身も、自己告白に伴う「言葉を飛び出させる暴力」について語っており、「宣言としての暴力」の概念を自己自身の経験から解釈し、深化させたことを論じた。（なお当初発表に含める予定だった成田・花崎編『近代化のなかのアイヌ差別の構造』（1985）については時間の関係で割愛せざるを得なかったことを付記する。）

○コメンテーターに対するリプライ

第一報告

・武田泰淳『ひかりごけ』において、M（知里真志保）がアイヌの食人の習慣を批判している点ついてコメントが出された。この点に関連して、食人が行われる場面ではイオマンテの祈祷音楽が鳴り響く設定になっており、アイヌ文化の中に見られる殺生を不可避とする考え方が示唆されていると述べた。

・1950年代における反差別闘争の文脈とアイヌとの関わりについて質問が出された。コメンテーターは被差別部落の場合は国民主義的包摂がなされる方向にあったと指摘したが、アイヌも被差別部落と近い位置づけにあったと思われると応答した。また、1950年代においてアイヌと国際的な民族独立運動との連携はなかったが、1970年代には、アイヌの民族復権運動とアメリカ先住民などの国際的なマイノリティ運動と連動する動きがあったと指摘した。

第二報告

コメンテーターから、「宣言」や「受苦」としての「神的暴力」という解釈を取り出した点を評価していただくと同時に、それが花崎・村山の実際の言葉に「付着」させうるか否かというコメントをいただいた。「神的暴力」が言語の意味生成や理解可能性によって捕捉されるのかという問いである。本質的な指摘として受け止めたが、花崎のいう宣言は、既存の言説・表象体制では語りえないものであり、それを打ち破る力を持つ点は評価しうると考える。

○フロアからのコメントとリプライ

第一報告

・出自を明かさないアイヌが多い背景として、「同化か、民族主義か」の二元論的な思考が深く関わっていること、アイヌをめぐる固定的なイメージがあるために、アイヌが声を上げにくい状況があり、声を上げても排他的に扱われる傾向がある、とするコメントが出された。

・アメリカにおいて先住民のアイデンティティを表明する人口が増加傾向にある背景として、先住民についての認知が進んだことに加えて、政治的メンバーシップに付随する資源を得る目的がある、日本では、そもそも先住民のメンバーシップを定める基準が存在しないというコメントが出された。

・国内のマジョリティの状況がマイノリティの運動に影響を与えるという問題関心から、武田泰淳が日本をどのように捉えていたのかという質問が出された。武田は、批判的な観点からではあるものの、日本を同質的なナショナリズムの優勢な社会であると考えていたと思われると応答した。

第二報告

・国家形成しない先住民社会における暴力についての問題関心から、暴力は社会理論的にどう把握されているのかという質問があった。重要な問いだが、花崎においては既成秩序を自己否定する暴力の次元に焦点が当たっているのではないかと応答した。